

土器製作技術からみた東北アジア稲作伝播期における文化変化の研究

三阪, 一徳

<https://hdl.handle.net/2324/1654592>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名	三 阪 一 徳			
論 文 名	土器製作技術からみた東北アジア稲作伝播期における文化変化の研究			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	宮本 一夫
	副 査	九州大学	教授	坂上 康俊
	副 査	九州大学	教授	遠城 明雄
	副 査	九州大学	准教授	辻田 淳一郎

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

縄文時代から弥生時代への移行は、狩猟採集社会から水稻農耕社会への変化を示すものであり、朝鮮半島南部の無文土器文化の移住民やその影響によって生み出されたものであることが知られている。本論文はその中でも北部九州における黒川式土器から夜臼式土器への土器変化を、従来の組成論や様式論以外に土器製作技術から解明し、さらにその土器製作技術の系譜が朝鮮半島の無文土器にあることを実証的に示すとともに、縄文から弥生への移行期に見られる土器製作技術の変化が、朝鮮半島の新石器時代から青銅器時代の無文土器の出現期にも見られることを初めて明らかにした。さらに、そうした朝鮮半島無文土器の土器製作技術の系譜が、遼東半島の偏堡文化にある可能性を示した。

本論文は全体で 7 章からなっている。第 1 章では、東北アジア稲作伝播期における文化変化や土器研究の膨大な研究史をまとめ、その問題の所在を明らかにした。

第 2 章では、縄文時代から弥生時代移行期における土器製作技術を土器観察に基づいて実証的に論ずる。これにより、土器の土器組成変化とともに土器製作技術の無文土器文化の影響が現れるのが夜臼 I 式であり、それは地域的には唐津平野から糸島平野において最も強く現れることを明らかにする。

第 3 章では、朝鮮半島南部における新石器時代から青銅器時代における土器製作技術の変化を、韓国における土器観察によって実証的に明らかにしている。新石器時代から青銅器時代への土器製作技術は、縄文から弥生への移行と相似するように変化するとともに、無文土器の土器製作技術こそが弥生時代の土器製作技術の直接の祖形であることを実証的に明らかにした。

第 4 章は、遼東半島における新石器時代から青銅器時代への土器製作技術を、上馬石貝塚を中心とした実資料を基に比較検討した。これにより、朝鮮半島無文土器や弥生土器の土器製作技術の系譜が遼東半島の偏堡文化にある可能性を示している。

第 5 章は、東北アジアにおける稲作農耕の伝播過程をまとめるとともに、木材加工技術の変化や農耕伝播との関係をまとめる。こうした東北アジアの初期農耕や木材加工技術の進展から、少なくとも日本列島の弥生時代開始期には、木材加工技術や稲作農耕の開始と土器製作技術の変化が相関する可能性を考える。

第 6 章では、北部九州における縄文から弥生移行期における文化変化を検討するとともに、朝鮮半島の新石器時代から青銅器時代の文化変化を検討する。さらにこうした二つの地域の生業変化を伴う文化変化を検討することから、文化変化の特質を明らかにしていく。

第 7 章は、これまでの東北アジア各地域での土器製作技術の変化過程やその地域的な系譜関係を

示すとともに、そうした土器製作技術の変化と文化変化との関係を明らかにするものである。

このような東北アジア全体の土器製作技術の系譜関係を明らかにした論文は、これまでにないものであり、さらにそうした土器技術の系譜関係を背景に、縄文から弥生の文化変化の意味を問うた優れた論文である。以上から、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると認めるものである。